美郷町歴史民俗資料館・佐々木毅記念室オープン記念

佐々木毅氏座談会

■記念室の開館に際し、論文や研究図書をはじめとする貴重な資料を寄贈・寄託された功績により、美郷町貢献者表彰状が佐々木毅先生に贈られました。

■オープン当日の様子

美郷町歴史民俗資料館・佐々木毅記念室が10月1日にオープンし、同日佐々木毅先生を招きオープニングセレモニーが開催されました。セレモニーに先立ち、先生と幼少期を共に過ごした同級生による座談会が行われました。座談会では、久しぶりの再会を互いに喜び、当時の生活の様子や小中学校時代の思い出話に花が咲きました。座談会の内容を一部抜粋および編集し、紹介します。

【参加者】
佐々木　毅先生
髙橋　優さん（千屋中部）
細井　陽悦さん（千屋北部）
田口　恵子さん（一丈木）
髙橋美紀子さん（一丈木）

◎小学校時代の思い出

佐々木　あの頃は学校というのが社会の中心だったから、とにかく学校の行事がもっている重みみたいなものがあって、やはり運動会とか学芸会などは大人たちがこぞって、凄い熱気だったような記憶がありますね。

細井　小学校一年生から六年生まで運動会と学芸会が二大イベントでその時に保護者の皆さま方も集まるわけですけども、その学芸会では佐々木先生は王子様や王様、それからおじいちゃんでも非常にいいおじいちゃん役、それか主役を常に張っていました。そしてそのお姫様役は田口恵子さんで、主役はこの二人。我々はその他大勢で色々な小回りの役をやって学芸会全体を盛り上げていました。

田口　飾り役ですよ。

佐々木　おじいさん役の方が多かったかもしれないな。

◎中学校時代のエピソード

細井　中学校二年生の三学期まで、先生は一緒に千屋中学校に在籍していました。科学部に当初は入っていたみたいだけれども、その後に合唱部と相撲部に入部し、とにかく何でも頼まれれば断らないタイプでした。

髙橋(優)　あんまり学校で勉強している姿って見たこと無いね。

細井　強烈に思い出すのは中学校一年二年の時のことなのです。受験雑誌で疑問点が出た場合に、田口雋三先生に休み時間に相談をして、色々と指導を受けていたというのが印象に残っています。あの時、佐々木先生の質問は、やっぱり大学を卒業したばかりの先生でないと対応出来ないレベルだった訳です。やっている内容は、もう数学でも代数とか我々のレベル以上のものを色々やっているのだけれども、それに答えられるのは田口雋三先生しかいなかったみたいでした。雋三先生はあの通り熱心に答えてくれるので、とにかく二人でやりあうのを教員室や廊下で見ていて、その時からもう違っていました。

佐々木　受験というのがあるということを知らなかったのです。呑気でしたよね。とにかく受験というものがあるというのは、六郷の本屋に行って、受験雑誌があるというので初めて分かったという塩梅でした。あの頃は蛍雪時代とか旺文社とか学研とか、そういうのを初めて見たら、やはりこういう世界があるのかという話だったんですね。当時は入学試験も全教科、音楽まで試験がありましたよね。高校に

入るときに。

髙橋(優)　でも休み時間に遊んだりして、ガリ勉では決してなかったものだから、いつどこで勉強してるものなのかと思っていました。

髙橋(美)　送別会でカレーを作ったのは覚えていますか？

佐々木　覚えています。

髙橋(美)　よかった。あの時は食堂も何もなかったから、自分たちで作ったのよね。

◎恩師からのメッセージ

細井　この詩は、小学校六年生の担任の草彅武先生が、豊成中学校の校長先生で在籍していた時に、校長会の火山脈という冊子があり、それに載せられたものです。佐々木先生が三十五歳で若くして東大教授に昇任された時の印象の詩なのですが、これを見て頂くと非常になるほどということが書いてあるんです。最初を見てみますと「君は小学校時代からの大志を実現した君は『将来の希望』に『大学教授』と書いた」ということで小学校の頃からこういった夢を担任が知っていたということでした。

佐々木　それは知らないなあ(笑)

細井　そして「君は6年生で三国志を読破し」とありますがこの三国志については、「秋田魁新聞シリーズ時代を語る」にも書いてありますが。

佐々木　これは分かる。

細井　小学校の時に、六年生で三国志を読破しノート五冊に書感を述べたとあり、草彅先生が言うからにはこれは実際のことなんですよね?見せたのですか？

佐々木　漢字の練習をしたようなものだよ。

細井　我々がその当時に、三国志が分かるわけないじゃない。そして「中学では名リーダーと言われ高校では常にトップを争い東大では現役からすすみ　卒業と同時に請われて研究の道に入った　君は青白き秀才ではなかった　体躯優れ相撲も強く気概に満ちた努力の人であった」ということで。何でもチャレンジして、一定のレベルまですぐ到達するのだけれども、勉強してはなかったわけです。それでここが問題なのですが、「思えば10年前の安田砦の攻防戦に『とめてくれるなオッカさん背中のイチョウが泣いている男　東大　どこへいく』のビラの中で　ゲバ棒とヘルメットの怒涛の中で　君は助教授として身を持って研究資料を守りぬいたのだ　君は今　若くして法学博士・東大教授となった　今日・この日　童顔にかえって師の前に額ずき　著書『マキャヴェリ』を送る　願わくば　若さと情熱で学会をリードされんことを　おめでとう　おめでとう」というものです。こうして当時の担任の先生が書いてくれていて、まったくこの通り現在まで歩んできたということは、当時から将来の希望は大学教授という高い志をずっともっていて、それを実際に実現したというわけです。

髙橋(優)　草彅先生が書いておられるということを、知らなかったのですか？

佐々木　知らなかった。将来の夢に大学教授と書いていたってことは知らなかった。

細井　いずれこれは大学教授に昇任した年、三十五歳になった時にたまたま昭和五十三年草彅先生がその詩をメモしたと書いてあります。

佐々木　このように分からないところで神話は作られています(笑)

■懐かしい写真や思い出の品々に、笑顔がこぼれます

　座談会の全容については、美郷町歴史民俗資料館・佐々木毅記念室内で閲覧できます。同級生同士ならではのエピソードが語られ、佐々木先生の人柄に触れることができます。皆さまのご来館をお待ちしています。

■左から細井陽悦さん、田口恵子さん、佐々木毅先生、髙橋美紀子さん、髙橋優さん

問い合わせ●美郷町学友館　☎0187(84)4040